

「いじめと僕の夢」

空知地区 岩見沢市立清園中学校 2年 谷内 楓

「どうして、僕ばかりこんな思いをしなければならないんだ！」

そう思っただけでも、声に出すことができなかった。心の声は、彼らの元には届かない。だから今日も、いつものように叩かれた。これは、間違いなくいじめだ。同級生達によるいじめは、小3の夏休み明けからずっと続いていた。どうして僕だけがいじめられるようになったのか。その理由が彼らの口から聞いたのは小5の終わり頃。それまでの約2年半、僕は、自分だけが差別されていることや、暴力を振るわれていることにずっと悩んできた。

いじめの理由。それは僕がハーフで、他の人と違ったからだ。ただそれだけの理由だった。僕は怒りと悔しさで胸がいっぱいになった。そんなくだらない理由でいじめられるなんて納得できない。理不尽すぎる。自分の生まれを変えることなんて誰にもできないのに。自分はおろか、自分の大切な家族までもが否定された気持ちになった。悔しくて悔しくてたまらなかった。いじめっ子たちに対する怒りももちろんあったが、彼らと向き合わず、いつか誰かがなんとかしてくれるだろうと、他人に解決を任せ、自分からは何もしようとしなかったのが情けなかった。

僕をいじめから救い出してくれたのは5・6年の頃の担任の先生だった。長嶋先生がクラスに掲げた二つのきまり。それは、「人を傷つける言葉や行動は絶対に許さない」と、「頑張っている人や頑張っていることを認め合う」ことだった。今、思えばすぐ当たり前のことだが、恥ずかしいことに中二になった今でも守れていないときがある。長嶋先生は、このきまりを守らない人がいると、長い時間をかけてしっかりと話してくれた。このことが集団生活を行う上で大事なんだという先生の思いが伝わった。この、きまりのおかげで、僕はひどい「いじめ」から解放された。しかし、目に見える暴力はなくなったものの、ちょっとした意地悪や差別は続いていた。先生は、そのことに対しても全力で向き合い、関係者同士でしっかり話し合い、解決へと導いてくれた。

僕は、何事に対しても正面からぶつかり、全力を尽くす長嶋先生の姿を見て、深い感謝と深い尊敬で胸がいっぱいになった。このときから、僕の夢は「教師」になることになった。きっかけを作ってくれた長嶋先生はもちろん、そのときまでなんとなく見ていた先生方に対する視線は、熱いものへと変わっていった。子どもたちとどのように向き合い、どのような言葉をかけているのか。視野を広く持つと、先生方は1人ひとりに違う声かけや接し方をしているということがわかった。もちろん先生方にも個性があるので、使う言葉や雰囲気も違う。しかし、どの先生からも感じられるのは、子どもに対する「愛情」だった。いけないことをした人には、「怒る」のではなく、なぜダメなのかということ諭すための「叱る」だった。僕は、いじめられたことをきっかけとして、このようなことまで考えられるようになった。「いじめのおかげで」というふうになると誤解されてしまうかもしれないが、自分の視野が大きく広がったのは紛れもない事実だった。

いじめを通じて見つけた僕の夢。教師。「どんな先生になりたいですか」、そう聞かれたら、僕は迷わず答えることができる。長嶋先生。僕の「恩師」であると同時に、「理想」だから。僕は先生のような人になりたい。そのためには、まず、人から信頼されるような人になること。信頼は、毎日の誠実な行いによって作られる。勉強や生徒会、部活動はもちろん、掃除などの当番活動においても手を抜かず誠実に取り組み、努力を惜しまず夢に向かって走り続けたい。あの日の僕のようにいじめに苦しむ子どもの光となれるように。